
眼球、エルユーヴィー、雌羊。

立花 凛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眼球、エルユーヴィー、雌羊。

【Nコード】

N3238Q

【作者名】

立花 凜

【あらすじ】

自殺に満ちた世界で後ろ向きに歩む青春小説。

あの世の存在が証明されて自殺者が異常な程に増えた世界。

両親が自殺、姉が薬物中毒で死んだ主人公で高校二年生の田原優介は、部員が自分と、また同じように暗い過去を持つ松波紗季の二人しかない生物同好会いきものに所属していた。

サキや友人の宏や浦路、化学教師の岡崎弥生たちに囲まれながら退廃的に日々を過ごす彼の日常は、ゆっくりと結末へと向かって転が

つてゆく。

難しいことを考える必要は無い。ただ、身体が動くのにまかせて空っぽの頭で、無意識のままに。

俺は、ボールを投げる。放たれた球体は音も無く籠に吸いこまれた。

□

「許して」

許しを請うているとは思えない程面倒そうな声で宏が容赦を求めた。俺の知っている許しの請い方はこんな適当なモノじゃ無い。俺は決して仏のように優しくは無いので、一ミリ秒も考えることなく断ることにした。

何だか学生にとって、金銭程大切なものは無い。だから「体育のバスケで先にシュートを決めたほうが五百円貰う」と言う約束を取り消すなんて選択肢は、俺の頭の中には一切無いのだった。加えて、さっきのあの態度。何処に許す必要があるって言うんだ。

「煙草吸ってるの、先生にバラすぞ。」

「… 百円だったよな」

宏が諦めた表情で体操服のズボンのポケットから財布を取り出しながら言った。

「死ね」

「分かったよちゃんと五百円払うからもうちょっと優しく」

「後で払ってくれ。」

宏のセリフを途中で遮って、俺はゼッケンを脱ぎ捨てる。賭けは終わったのだから、これ以上真面目に試合に参加する必要は無い。ほとんど動いていないからだろっ、汗は少しも掻いていなかった。

「またサボんのか。」

宏が呆れたようにそう言うのを無視して、俺は体育館の出口へ向かう。体育教師が何か言いたそうな顔をして見ていたけれど、気にせず体育館シューズを脱いで下足に履き替える。少しぐらい非常識な振る舞いをしたところで、彼は俺たち生徒を怒ることが出来無い。

「田原っていつも途中で抜けるよな。」

外に出て体育館の壁にもたれながら息を吐いていると、そんな声が体育館の中から聞こえてきた。別に聞こえなくてもいいのに、俺の無駄な聴力はどうでもいい会話を拾ってくる。今まで耳がいいおかげで得をしたことなんて一回も無いような気がした。いつだって届いてくるのは無価値な会話だけで、大切なモノなんて少しも届かない。

「運動出来るのに何でだろうな。」

「体育だけじゃ無いだろ、普通の授業も抜けてばっかりだ。」

「成績も良いのに何でだろうな。」

「成績良いからサボるんじゃないの？」

そんなの関係無い。ただ、面倒だから。授業に出るだけの気力を持ち合わせていない人間の屑だから、サボるだけ。きっと成績が底辺だったとしても俺は授業に出ないだろう。要するにただの馬鹿で筋金入りの落ちこぼれだ。

「そう言えば二組の奴がまた」

「ああ知ってるよ。」

——また自殺したんだろ？

「二組はもう三人目か……。」

俺は真つ青な空を見上げながら呟いた。俺のサボりと同程度の事件として語られる同学年の生徒の自殺のニュース。続いて駅の近くの高層ビル屋上から飛び降りたらしい、と言う情報が聞こえて来た。高二になってからまだ数ヶ月しか経っていないのに、もう三人も

自殺しただなんて。全くもって数年前までは信じられなかった様な事実だ。そして今は特別な違和感など無しに受け入れられる事実である。

それは俺にとっては有難いことなのかも知れなかった。教師が授業をエスケープする俺を叱れないのは、自殺されるのが怖い所為なのだから。

「死んだって一緒だろうに……。」

溜息と共に、吐き出した。

空は、どこまでも透き通っていて、どこまでも広がっていて、手を伸ばしても届きそうには無かった。

「なんだ、せんぱいも来てたんですか。」

生物同好会と書かれた部屋の扉を開けると、そこには先客がいた。無造作に伸ばした色素の薄い髪、いつだって気怠そうな表情の、けれど美しい顔。教室から無断で持ってきた木の椅子に座って本を読んでいる痩せた一つ年上の女子生徒。

「生物の授業だったから。」

せんぱいはつまらなさそうにサボりの理由を告げた。

「ああ、生物ですか。」

それはそれは、俺も一番嫌いな授業ですね。部室の真ん中の長机に置かれた花瓶を眺めながら、そんなことを考える。テストでも、ほとんどの科目は満点に近い点数を取っているけれど、生物だけは零点に近い点数を取っているのだ。

「死ばっかり扱う生物ですか。」

俺が小学生だったころまではそうでは無かった。

理科の授業では、普通に生きている動植物についての教養を深めるための時間を過ごしていた。けれど、今は動物が、植物が、いのちを失うことについてしか触れない。すでに「生物」と言う呼称が相応しく無いのは明らかだった。

「おかげで生きてるものを扱う俺たちは同好会に格下げですもんね。」

そして生物教室を活動に使うことも許されずに、文化部部室棟の一部屋を与えられて、そこで活動することになった。生きた動植物を扱うサークルが一切無くなった学校も多いことを考えれば、これでもマシな方だけだ。「せいぶつぶ」から「いきものどうこうかい」へと名前が変わったとしても、決して活動が出来なくなっただけでは無いのだから。

「もう部員も二人だけだから、来年は無くなるわね。」

「そうですね、悲しいですね。」

壁際に置いてあるメダカの水槽の中に餌を放り込みながら、思ってもいないことを呟いてみる。作り物の水草の間をすり抜けて、メダカたちが餌に群がった。そして思った通りせんぱいは反応を返さずに、無言で手元の活字を追っていた。

ページをめくる音がぱらり、ぱらり。

「そう言えばまた自殺らしいですよ。」

俺も真面目な高校生らしく読書に励もう、と本棚からハードカバーの本を一冊取り出して表紙をめくった。「スペインの宇宙食」とやら。見るからにつまらなさそうな本だ。

「向こうにだって社会があるんだから、」

開いた本は、期待した通りイントロから意味不明な文章が始まっていた。悪趣味百科とやらの紹介が、妙に気取った文章で綴られている。少しも頭に入って来やしない。

「自殺したってどうせ向こうで同じ目に会うでしょうに。」

けれど、頭の中を筆者の経験や思考が素通りしていく感覚が俺は好きだった。何も考えずに文字を読むだけで、筆者の沢山の記憶が俺の脳細胞を満たしていく。

「あの世の存在が証明されてから自殺者は五十人に一人まで増えたりしいわ。」

ガタ、と言う音を立ててせんぱいが椅子から立ち上がった。

「サキせんぱい、また裸足ですか。」

「靴も靴下も嫌いなもの。」

部屋の隅に脱がれた靴下と靴を指差してそう言っと、裸足のまませんぱいは扉へと歩いていった。制服のスカートのから覗く脚は腕のように細くて、歩いているだけで折れてしまいそうだった。

ぺた、ぺた。

「授業に戻るんですか？」

「ちよっと買い物に行くだけ。そのサンダル取って。」

そのの、と言いながらせんぱいはどこにあるのか全く伝える気が無いようだ。俺は勘で本棚の下を見る、そこには思った通り何の飾りもないビーチサンダルが入り込んでいた。

「どうぞ。」

取り出してせんぱいに手渡すと、せんぱいは面倒そうに足を突っ込む。せんぱいの綺麗な足の親指と人差し指の間にビニールの鼻緒が挟まった。

「俺はこの後の授業も全部サボるのでずっと此処にいます。」
「分かったわ。」

ガチャ、という音がして扉が閉まって、先輩のサンダルが立てるつまらなさそうな足音が遠ざかって行く。静かになった部屋の中には俺が一人、残った。

1 - 2 (後書き)

ヒロイン二人目登場。ちなみに一人目は宏です(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3238q/>

眼球、エルユーヴィー、雌羊。

2011年1月28日20時25分発行